

今年は、本科生・日本語科生合わせて80名での合宿になりました。1年ぶりの泊りでの合宿ということもあり、念入りに事前準備に取り組みました。合宿後はさらに交流が深まった様子がラウンジでも見受けられるようになりました。

合同合宿 日本語科1年 張碩 (Zhāng shuò)

先日、日中学院の先生と学生は全員九十九里浜へ合宿に行った。これは日中学院にはいつから二つ目の全校的な交流活動だった。今回の合宿は色々な面白い活動があり、先生も学生もみんなむちゅうになって、楽しんでた。私ももちろんそう思ったけれど、留学生である私にとって、一番やくだったのは日本語で日本人と交流して、自分ももっと日本人らしく話せるようになったことだ。

バスで目的地に行く途中、ある日本で育った韓国人と男女の付き合いの習慣についてたくさん話した。中国では、もし男の子が女子を好きになったら、まずプレゼントをあげるとか、食事をごちそうするとか、映画を一緒に見に行くとか、色々な手段を使って、女の子を喜ばせてから、自分の気持ちを相手に表すことが多い。でも彼は韓国人は大体ははんたいのことをやるのが多いと教えた。まず付き合ってくださいと気持ちを表して、そのあと付き合ってみる。最後にいい感じになったら結婚するけれど、わるい感じになったら、さようならという結果だと聞いた。とても信じられない。でも、日本人は両方と違って、男の子はいつも気持ちを表に表さず、お互いに何も話さず相手の心が理解できる。これは話より行動のほうが分かり易いと言うことだろうか。話しは1時間半くらい続いた。日本語の勉強にもなったし、3つの国の文化の違いも理解できた。とても面白い交流だった。

当日の夜、みんなは興奮しすぎて、眠れない学生がたくさんいた。当然私もその中の1人だった。偶然チャンスがあって、私は研究科のある学生と交流した。話した内容は言語の学習方法だった。私たち2人はお互いのしゃべる能力と聴く能力に感心しながら、自分の学習方法を相手に教えた。意外だったのは、私たちが言語を勉強する順番が同じだったことだ。

最初はもちろん50音図、漢字ピンインから始まった。でも、そのあとは、文法の勉強ではなく、発音と語感のほうが先だと私たちは思った。もう十分練習して、発音がだんだん良くなって、語感も少し身についたら、文法の勉強も始める。それでもまだまだおそくないと思った。実はアニメや映画などよく見る学生たちは、確かに教科書だけを勉強する学生より言語を使う能力がずっと高い。今から見れば、私は日本語を教科書ではたった2ヶ月だけしか勉強しなかったけれど、日本語のアニメは5年間ずっとみてきたから、今はべらべらとは言えないけれど、すくなくとも話して交流できるようになった。しかし、英語はもう10年以上も勉強してきたのに、今でも全然喋ることができない。これが勉強する順番の違いだったのだろう。言語は勉強するものではなく、使うものだとこの研究科の学生が教えてくれた。本当にいい言葉で、素晴らしい交流だった。それに、自分がこんなことを全部日本語で話せることも嬉しかった。とてもいい勉強になった。

今回の合宿で、私はたくさんの日本人と交流して、友達になった。これからもっと日本人の友人を作って、もっと日本の文化を勉強して、もっと日本語を生活に使って、もっと早く日本人みたいに話せるようになりたい。だから、もっと頑張ろうと思う。



特別講座「中国結び講座」作品展

A 先生の新語コーナー



zhíguòmínzú “直过民族”

直接移行民族。“直过”は、“直接过渡”の略。原始社会又は奴隷社会から、幾つかの社会形態を飛び越え、現代の社会形態に直接移行した人口が比較的少ない民族を指す。広西のヤオ族、雲南のラフ族、プーラン族など。英語では「社会主義へ直接入った民族」と表現されている。これらの少数民族は歴史的地理的要因により貧しい地域に住んでいるケースが多く、中国政府は彼らが貧困から脱却するのを支援している。

(A)

本科・日本語科合同合宿

皆さんこんにちは、私は本科1年の濱田馨子です。四月に日中学院に入学し、早一ヶ月が過ぎました。先生や先輩たちの顔を覚え、同学たちと打ち解けてきた頃、交流を深めるため本科・日本語科合同で合宿が行われました。

私は合宿委員として準備に携わり、その試みの中で名札の制作、浜辺でのアクティビティの企画を担当しました。

この合宿の様子をお知らせいたします。

春が終わり、初夏が始まるころ千葉県茂原市の近くにある白子町まで私たちはバスで出かけました。天候は薄曇り、気温は高く、バスの窓から入る風が心地よく感じました。

おおよそ二時間かけホテル・ニューオーツカに到着です。部屋の窓からは灰色がかかった九十九里の海が見えます。到着後は皆が逸る気持ちを抑え、いただきます!と大きな声で挨拶し、待ちに待った昼食を頂きます。

昼食後は合宿委員会による企画でスポーツ大会が行われました。競技は卓球とドッチボールの二種目です。

日本人、留学生混合の班で対抗し、会場のあちこちで歓声が飛び交い、和気藹々とした空気が流れました。

優勝した班には賞品が送られ、喜びもひとしおです。

夜の交流会では、クイズ大会が行われました。日中の楽曲を使ったイントロクイズでは、最初の数秒を聞き逃すまいと皆耳に神経を集中させ、部屋が度々静まりかえります。見事優勝した班には賞状が贈られました。

本科1年 濱田馨子(はまだかおるこ)

クイズの後は出し物の時間です。最初に学院長先生の篠笛を聞かせて頂きました。

篠笛は竹から作られる素朴な笛で、朝靄の様な柔らかい、しっとりとした音色を奏でます。学院長先生に続けと私もステージを借り、歌を一曲披露しました。出し物を有志陣・各学年披露し、沢山の生徒達の顔を覚えるきっかけになりました。出し物の中でも研究科による二人羽織は大盛り上がりでした。普段は冷静なイメージのある先輩達のお茶目な姿を見ることができ、面白かったです。個人的に大変面白かったので、是非また文化祭の時に披露して頂けたら、と思っています。



2日目は朝からジェンカを踊り、浜辺と室内に分かれて活動しました。私は浜辺係としてビーチバレーを企画していましたが、強風のため実行出来ませんでした。個人的にマシュマロを焼く会を計画していたので、浜辺に来ていた生徒達と国籍を問わずマシュマロやお菓子を焼いてとても楽しく過ごしました。帰る前には同学達とゴミ拾いを実施し、沢山拾いました。

30分足らずの時間で取り組みましたが、目に見える範囲の丘陵と浜辺にはゴミは見当たらず、気持ち良く浜辺を後にしました。

あっという間に合宿は終わり、バスに乗り込み気付けば飯田橋に到着です。

車内で同学達が陽光を浴びて静かに寝ている様子を見て、濃厚な時間を共にできたと感じました。

(手製の名札)



通訳ワークショップ

サミュエル周先生と通訳の現場体験

中国からのインバウンドの旅行客が増え、また3年後にオリンピックの開催を控え、「中国語を使って通訳をする!」という夢が膨らみます。実際チャンスもたくさんあるかもしれません!ということで、プロの中国語通訳のお仕事の現場をちょっと覗いてみませんか?

今回、日中通訳の第一線でご活躍されているサミュエル周先生をお迎えして、学生の代表に通訳体験をしてもらいながら、素晴らしい通訳の世界へ案内していただきます。通訳に興味のある方、ふるってご参加下さい。

■日時: 2017年8月5日(土)
13:00 ~ 15:00 (12:40受付開始)

■講師: サミュエル周先生

■会場: 日中学院内教室

■参加費: 500円(当日お支払下さい)

■定員: 50名

参加ご希望の方は日中学院事務局までお申込み下さい。皆様のお申込みお待ちしております。

サミュエル周先生プロフィール

通訳者。香港出身、香港理工大学と京都大学で学び、中国語と広東語の通訳業に従事、商談や国際会議だけでなく来日した多くの華流スターと映画監督らの通訳も務めた経験があり、食と異文化の交流には強い関心をもつ。

一 西双版纳水かけ祭りと

麗江を訪ねる旅6日間－(第2回)

栗原 弘子

4月15日(土)雨 気温27C 西双版纳

終に西双版纳最後の日になった

自由市場は地元の人々の活気に溢れていた。

ぴちぴち跳ねている魚やエビ、解体中の肉や生きた鶏まで多種多様だったし、野菜や果物も新鮮そうだった。ここには日常生活に必要なと思われる物は何でもあるような気がした。

最後の見学地は西双版纳熱帯花卉。広大な敷地の中を歩きながら植物を見る。ヤシの木が風にそよぎ、ハイビスカスの花があちこちに咲いている。熱帯植物を初めて見る者には全てが珍しいので、樹木に付されたプレートの説明を1つずつ読んでいく。勿論中国語表記だが、漢字圏に住む者の強みで何となく理解できるから不思議である。「炮弹果」という植物はその名の通り、大砲のような大きな実がついており、頭上に落ちてきたら一溜まりもないであろうと思われた。「見血封喉」の樹液は矢に塗り小動物を射れば短時間で息絶えるという。物騒な木もあったが、ジャック・フルーツやカカオ・パパイヤもあり観光客があまり多くなかったので熱帯植物や公園の雰囲気を楽しんだ。

ガイドのアンちゃんと別れて昆明へ。外は雨で服装も半袖から、ジャケットに変えた。

ホテルへ向かうバスの中で市の紹介と玉龍雪山のエピソードが披露された。エベレストは様々な人が登頂を試み成功しているが、玉龍雪山は未だ未踏峰だそうだ。1991京都大学の山岳部と中国登山隊が合同チームを結成し、登頂を試みるも雪崩が発生し、17名が遭難したという。やはりあの山は神の棲む山ではないかという思いを強くした。

最後の晩餐会はホテルのレストランで行われた。明日は空港で分かれてしまう劉さんとの最後の夕食なので、皆が拍手これまでの労

をねぎらい、雲南最後の料理に舌鼓をうった。かの有名な過橋米線は一人一碗で丼のような大きな器に入っていた。どの料理も洗練されていて美味で、食器も高級感溢れていた。やはり昆明は人口700万人の大都市であった。

4月17日(月)雨 旅行最終日

4:30起床。各自退出手続きを済ませホテルを出発。宿を発つときホテルからは朝食のお弁当が、旅行社からは雲南の銘菓が贈られた。今までお土産を買ったことが無かったのでとうれしかった。

外は雨であった。昆明空港は広大でバスは市内見物でもするのかと思われるほど長く長く走ってようやくタラップに着いた。後は乗り継ぎと出国手続きさえ済めば、OK。上海空港では、カードを使って買い物ができるではないか。私の脳裏に華やかなブランド品の数々が浮かんだが、世の中そう甘くはなかった。

国内線を降り、広い広い上海浦東空港を国際線へと移動する時には、人が混みあいここではぐれたらどうしようとしん怖くなった。滑走路の渋滞と航空機の到着遅れで、羽田には18:10に着いた。中国語“才”の使い方が実感できた瞬間であった。

荷物を受け取るまでの時間を使って簡単な解散式を行う。ハプニングもあったが、皆元気で無事帰って来られて良かった。

今回は金さんも私も初めての旅行の引率だった。不手際な点も多々あったと思うが、皆様にはお許し頂き、反省を次回の旅に活かしたい。

最後になるが、この紙面をお借りして、旅行のために難しい日程・フライトを調節し、手配してくれた日中平和観光の皆様、添乗員の森田さん、日中学院事務局の渡辺さんに改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。



7月の日中学院

星期日	星期一	星期二	星期三	星期四	星期五	星期六
						1 ●別科266期 授業開始
2 ●日本語能力試験	3 ●日本語科定期 試験(～7日)	4	5 ●本科1年 朗読大会	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15 ●日本語科ホーム ステイ(～7日)
16	17 ●祝日	18	19	20	21 ●日本語科 個人面接	22
23	24	25 ●本科定期試験 (～7/31)	26	27	28	29
30 ●本科2年短期 研修帰国	31 ●本科・日本語科 1学期授業 最終日	●8月の日中学院 ・1日…本科夏休み(～31日) 日本語科夏休み(～24日) ・5日…サミュエル周先生講演会 ・8日…別科夏休み(～20日)		・8日…夏期集中講座(～10日) ・13日…閉門(～20日) ・21日…別科授業再開 ・25日…日本語科授業再開・避難訓練 ・26日…本科入学希望者のための無料公開講座		

図書室 だより ライブで楽しもう

●『チャイ語入門 李先生の中国語ライブ授業』(CD付き) 李軼倫 著 白水社



かつて本学院でも教鞭を執られ、現在NHKの国際局アナウンサーやナレーターとして大活躍の李軼倫先生が、世代も趣味も違う個性豊かな生徒たちと楽しい授業をくり広げます。気が付けば自分もクラスの一員。一緒に笑ったり、感心したり、うなずいたりしながらどんどん授業に引き込まれ、知らず知らずに文法が身についていきます。

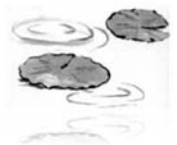
●『漢詩花ごよみ 百花譜で綴る名詩鑑賞』渡部英喜 著 牛尾篤 画 壺紀書房



本書によると諸々の花には花の神が存在するという。また、中国最古の詩集『詩経』には女性が男性に求愛する時には植物の実を投げつけるとあるそうで、そんな興味からページを開いてみました。

さて中国の今を美しく彩るのはハス。総称は荷・芙蓉ですが、茎、葉、花、実、根など、部位によってなんと8種も呼び名があるという。日本語で「蓮」と言っているのは実のことになります。蓮に祈りをこめ、好きな人に投げつけたくなるのは私だけでしょうか。

四季の花々の知識を深め、それらが詩人の心にどう映ったのか、ロマンティックに鑑賞できます。



— 新 着 図 書 — (著者・出版社省略)

- 精選 中国語基本文例集 第2版 (CD付き)
 - 精選 中国語重要文例集 第2版 (CD付き)
 - 通訳案内士 中国語 過去問解説 (平成28年度公表問題収録)
 - 中国語文法ワールド 日・英・中 三方攻読
 - Podcastで学ぶ中国語エピソード100
 - 習近平の中国 百年の夢と現実
 - 現代中国入門
 - 人民元の興亡
 - 宗教の世界史5 儒教の歴史
- ほか、掲示にてお知らせしています